主体の脱構築をめぐって

林宮玉

本書は、「不定の二人称への言表行為」を軸にし、1960 年代から 2010 年代までの 50 年を超えるスパンで、ジャン＝リュック・ナンシーの思想の生成過程を丁寧に辿り、その細部の思考まで検討する議論の精緻さと思想の全貌を提示する明晰さを兼備している。本書は大きく以下の二点において意義深いものだと考えられる。

一つ目は、ナンシーが彼と緊密に結び付けられてきた「不可能な共同体論」から解放された点にある。本書は、共同体論を中心とした従来のナンシー研究では見落とされてきた「無為の共同体」以前のナンシーを掬い上げ、彼の共同体論を 1960、70 年代で行われた思考の延長線に位置付けることによって、「不可能な可能性としての共同体」として流通しているナンシーの共同体論についての新たな解釈を提示した。ナンシーの共同体論をその思考の到達点ではなく、思想の生成過程における重要な通過点として位置付け直すことで、共同体以前の「言語」に対する関心から、晩年におけるナンシーの思考が到達した「意味」という概念まで、「不定の二人称への言表行為」という一貫した筋が浮き彫りにされている。この点において、「不定の二人称への言表行為」という解読格子は非常に有効であると考える。

二つ目は、ナンシーの思考をデリダが打ち出した「脱構築」という思想の流れに寄せて読み解き、「共同体論」が開いた政治・倫理的問題の議論よりも、言語なるものに対する関心を核心として持つ彼の哲学そのものに回帰した点である。この意味では、ナンシーとデリダとの間の思想的影響関係もまた本書を貫く影のテーマである。そこで、ナンシーがいかにデリダの議論を引き受け、デリダからの問いかけに対していかに応答したのかについての記述から、ナンシー自身の哲学の生成もまた一つの「脱構築」の過程として描かれ、その中で「脱構築」という戦略の抱える困難と危険性も明らかにされている。本書は時系列でナンシーの思想を追うが故に、テキスト上のナンシーの思想の生成過程はまさに生きられた思考の過程として読むことができた。

普段ジョルジュ・バタイユの思想研究を専門分野としている評者にとって、ナンシーについて議論する際は常にバタイユとの影響関係が想起される。そこで、ここではあえてバタイユとナンシーの関係を掘り起こすことでコメントとしたい。本書は共同体論やバタイユ、ブランショとの関係といったよく知られたナンシー読解を脇に置いているため、評者のコメントが筆者の意向に沿うかは判らない。だが、バタイユという観点は、ナンシーの議論の特異性を際立たせるうえで有効な手段の一つとなるだろう。

本書において、バタイユが詳しく論じられた箇所は二つある。まずは、第三章における主体の解体する地点としての「口」という表象についての議論である。次に、共同体論が論じられる第四章であり、そこでナンシーはバタイユの「至高性」という概念を「分有」として読み替えてい

くことが論じられている。

ここで注目したいのは、前者の「口」についての議論から引き出されうる、バタイユとナンシーの議論の相違点である。第三章では、著者はカント以来の主体定立の問題という哲学史的コンテキストと、ヌーヴォー・フィロゾフによる主体への再帰という時代的コンテキストとを交差させ、主体の問い直しの課題に対してナンシーがいかに思考したのかについて展開している。そこで、近代的な主体を創出したと言われるデカルトのコギトに対してハイデガー、デリダ、メルロ＝ポンティがいかに批判したのかを丁寧に追った上で、著者は言表行為論を軸にしたナンシーのデカルト批判を読み解き、ナンシーによる「主体の脱構築」について論じる。著者によれば、ナンシーは「エゴ・スム」という命題が成立する根拠を言表内容ではなく、言表行為に見出している。「エゴ・スム」、すなわち主体の成立を言表行為として捉えることによって、主体の成立と開始は言表行為という瞬間的な身振りにおいて同時に打ち立てられているということがわかる。つまり、主体は実はいかなる根拠も持っておらず、言表行為という身振りとして現れるのでしかない。こうした主体は最初から自己充足する主体ではありえず、むしろ常に崩壊の契機を抱えている。

ナンシーは主体の崩壊する地点において異質性という絶えざる運動を見出し、この異質性の運動を「誰か」という不定の人称と結びつける。著者によれば、ナンシーはこの不定の人称である異質性の運動が生じる空間を「口」として捉えている。口とはまさに人間が言表行為を行う器官であるが、ナンシーによれば、人間は口を通して意味を現実化しながらも、同時に現実化されえない、意味をなしえない余剰部分を持ってしまう。こうして、ナンシーの「口」は、「「現実態」への「閾」としての言表行為の場の形象」である[1]。

バタイユが言及されたのはこうした文脈においてである。そこでは、1930 年の『ドキュマン』における「口」というバタイユの論考が引き合いに出されている。この論考において、バタイユは人間の口を理性的な言語を発する器官であるが、また時には「叫び」を発することで人間における動物性を露呈させる境界のような位置づけであるとしている。著者はバタイユの「口」という論稿をナンシーのそれと同じく、口が占めている境界線という特殊な地点を強調するものとして参照している。しかしながら、主体を動物性と結びつけているが故に、ナンシーの議論とは直接的な関係が薄いものとして横においている。

バタイユの「口」について、ここではもう少し論じたい。というのも、この「口」の議論の背後には、「主体の崩壊」という問題をめぐるナンシーとバタイユの分岐が控えているからだ。

上述した「主体の崩壊」という文脈からすれば、『ドキュマン』の「口」はまた、「傷口（déchirure）」として読み替えられるだろう[2]。つまり、それはヘーゲルの主体が絶対知に到達する瞬間において

---

[1] 伊藤潤一郎、『ジャン＝リュック・ナンシーと不定の二人称』、京都、人文書院、2022 年、162 頁。

[2] 『ドキュマン』における「口」という短文は 1930 年に書かれたものであり、バタイユがコジェーヴの『精神現象学』入門講義に参加し始めたのは 1934 年からであった。タイムラグがあるとはいえ、「口」と「傷口」という二つの表象は同じく人間性／動物性という対立項の間の境界線をなしていることを鑑みれば、この連想はまったく強引なものであるとは言えない。

発した「なぜ私の知っていることが存在しなければならないのだ」という問いに隠されている「極限的な裂傷（extrême déchirure）」である[3]。バタイユの「口」を「主体の引き裂き」と結びつけることで、彼の主体に対する思考をまず確認しよう。

よく知られているように、バタイユはコジェーヴのヘーゲル読解から多大な影響を受けた。コジェーヴがヘーゲルの主奴弁証法を自身の独自の枠組みで再構成する際に用いた一つの枠組みとはまさに人間／動物という二項対立であった。コジェーヴによれば、真の人間として他者に承認されたいという人間的欲望が自然に没入し自らの生命を維持しようとする動物的欲望に打つ勝つことは、自分が真の人間であるという自己意識（絶対知）を手に入れるための必要条件である。しかし、ここでは人間的欲望の可能性はまた動物的欲望によって生かされているという現実的な困難がある。こうして、自己完成を目指すヘーゲルの主体は必然的に他者との承認をめぐる闘争において自らの死に直面することになる。ヘーゲルは哲学的言説体系によって死の契機を隠蔽することで主体（絶対知）を完成させるが、バタイユはその完成する瞬間にむしろ主体は死の乗り越えられなさを体験し、非知に陥る。つまり、死（への不安）という言説によって乗り越えられない「絶対的な引き裂き（déchirement absolu）」が主体に導入される。

「口」についての議論をナンシーがバタイユを参照していないとはいえ、主体の解体という問題をめぐって、ナンシーは「無為の共同体」においてバタイユの「引き裂き」について論じている。ナンシーによれば、主体（ナンシーは絶対者という表現を使う）における引き裂きはその自己完結不可能性を意味し、自我として主体に他者へと開かれることを課す[4]。この点で、ナンシーは主体の引き裂きが共同体を可能にする一契機であると認めている。一方で、ナンシーは「主体の引き裂き」という契機を以下のように批判している。彼によれば、「主体の引き裂き」に固執することはバタイユが暗黙のうちに主体を既に成立した実体と捉えるような思考に閉じ込められていることを示しており、したがって、「引き裂き」によって主体は他者とのコミュニケーションへと開かれるのと同時に逆説的にもまた主体自身に立ち戻ってしまう[5]。要するに、バタイユが問題とした主体における「引き裂き」は主体の崩壊をもたらすと同時に、主体の成立をも証言している。以上から、ナンシーは主体の解体という問題をめぐって、主体の引き裂きによってその成立に呼び戻されるバタイユと袂を分かとうとするのである。

主体の成立する瞬間に崩壊の契機を読み込むナンシーと、主体の解体する瞬間に主体の成立に投げ返されるバタイユは逆方向の議論を展開しているように見えるが、両者が同じ「瞬間」に迫ろうとする姿勢が読み取れる。この「瞬間」は主体の崩壊について語ること、すなわち「主体」の思考を避けて語ることの困難さに繋がると考える。既に述べたように、本書の第三章ではナンシーによる「主体の脱構築」の作業が展開されている。ここで主体の崩壊をめぐるナンシーのバタイユ批判はナンシー自身にも向けられるだろう。本書の内容に即せば、151 ページにおける「主

[3] ジョルジュ・バタイユ、『内的体験』、出口裕弘訳、東京、平凡社、1998 年、250-251 頁。
[4] ジャン＝リュック・ナンシー、『無為の共同体――哲学を問い直す分有の思考』、西谷修・安原伸一朗訳、東京、以文社、2017 年、13 頁。
[5] 同上、42 頁。

体の崩壊」という内容では、主体が成立する時点で常に崩壊の契機を内包していると述べられているが、主体の成立がその崩壊の前提となっていると理解することも可能であろう。また 162 ページのナンシーによる「口」の議論では、口という境界線において、意味の現実態が産出されると同時に、現実化されえない余剰部分も持っているということは、固有の主体と不定の人称の同時発生、あるいは表裏一体的な関係も読み取られるだろう。

このような言語の戯れは主体が崩壊する「瞬間」の接近不可能性（語り得ないこと）に我々を導く。ナンシー、あるいは脱構築の方法はこの「瞬間」を、主体の成立と崩壊の同時発生という二重の動きとして捉えることで、主体の解体によって、固定な意味から解放される不定な他者への交流の可能性を開いた。しかしながら、同じ二重性がゆえに、ある主体による特定な対象との対話によって生み出される具体的な意味内容は必然的につきまとう。したがって、誰でもよいあなたへの言表行為は常に具体的な意味の産出を伴うある主体の行為に転じることが可能である以上、その発話する主体の倫理性や社会性が問われるべきであり、つまり今度はあえて主体の成立する条件を問う必要性が現れているのではないか。